

2022. 9. 11 (日) 使徒4:5~12

- 4:5 翌日、民の指導者たち、長老たち、律法学者たちは、エルサレムに集まった。
- 4:6 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレクサンドロと、大祭司の一族もみな出席した。
- 4:7 彼らは二人を真ん中に立たせて、「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問した。
- 4:8 そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。
- 4:9 私たちが今日取り調べを受けているのが、一人の病人に対する良いわざと、その人が何によって癒やされたのかということのためなら、
- 4:10 皆さんも、またイスラエルのすべての民も、知っていただきたい。この人が治ってあなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によることです。
- 4:11 『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石、それが要の石となった』というのは、この方のことです。
- 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

<説教>

「使徒の働き」4章に入って、使徒たちの「敵、妨害者、迫害者、誘惑者」と言うべき人々が登場します。それはイエスをねたみ、憎み、拒絶し、殺そうとし、捕らえ、尋問し、罪に定めて実際に殺したのと同じ人々です。それが〈祭司たち、宮の守衛長、サドカイ人たち〉(4:1)であり、〈民の指導者たち、長老たち、律法学者たち〉(4:5)でした。そんな彼らがイエスに対してしたのと同じ態度で今度はイエスの弟子たち(使徒たち)に対してもいよいよ向かって来ました。彼らは、ナザレ人イエスの教えと行いは自分たちが持っている権威や自分たちの教えに反するものだと考えて(表向きは「神に対する冒涇」ということでもありましたが)、イエスを迫害し、捕らえて殺しました。そうやってせっかくイエスを始末してやれやれと思っていました。それなのに、それから二~三ヶ月ほど(最短で考えれば)もしたら、そのいまましいナザレのイエスの名によって(しかもそこに「キリスト」の名までくっつけて)、生まれつき足の不自由な人を立たせ歩かせ、更に多くの人々を教える者らが現れたのですから相当あせったのでしょう。そして、これは以前イエスにしたのと同様にその教えと行動をすぐに禁止しなければならないと考えたのでしょう。彼ら(まずはサドカイ派の人々ですが)はペテロとヨハネが〈民を教え、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることに苛立ち、二人に手をかけて捕らえた。そして、翌日まで留置することにした。〉(1-2a)のです。

〈翌日、民の指導者たち、長老たち、律法学者たちは、エルサレムに集まった。〉(5)こうして神殿の中の一室でイスラエルの最高法院・議会(サンヘドリン)の議会が開かれることになりました。〈二人が民を教え、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることに苛立った(4:2)のは、死者の復活を否定していた祭司長たちやサドカイ人たちだけではなかったようです。サドカイ派にパリサイ派も加わりました。〈大祭司

アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレクサンドロと、大祭司の一族もみな出席した。) (6)とサドカイ派は最高権威者の面々が勢揃いしました。もともと彼らはイエスが復活なさった後、墓の番兵に「イエスの弟子たちがイエスの遺体を墓から盗んで行った」と言うように命じていました(マタイ 28:12-15)。死人の復活を信じていたパリサイ派の人たちも、やはり自分たちが殺したイエスがよみがえったとは思いたくなく、そんなことをイスラエルの民に教えるような者を放っておくわけには行きませんでした。それは自分たちの権威、面子(めんづ)、「沽券に関わる」ことでした。何よりも「あのナザレ人イエス」の名が再びイスラエルの民に向かって公に堂々と語られ、人々の口に登り、その名によって教えとわががなされることが脅威であり、耐えられなかったのでしょう。しかしよく考えると、イエスの敵がそのように思い恐れることも、さらには今後彼らが益々頑なになることも、イエスが復活して生きて働いておられることの明らかな証拠だったと言っていると思います。やはり「使徒の働き」は「生けるイエス・キリストの働き」、「生けるイエスの御霊、即ち聖霊の働き」です。主役、主人公は生ける主イエス・キリストなのです。

さて、ペテロとヨハネはサンヘドリンに連れて来られました。(彼らは二人を真ん中に立たせて、「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問した。)(7) 「だれの名によって」も「何の権威によって」と内容的には同じで、言い換えれば「誰の命令か」「誰の許可を得たのか」という意味合いです。彼らはペテロとヨハネの〈教え〉〈イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていること〉を聞いていましたから、二人が「ナザレのイエス・キリストの名によって」行動し、教えていることはもう分かっていたはずですが。だから彼らの尋問には、「この神殿内の最高権威者は自分たちだ」「神殿の中でおまえたちがあのイエスの名で語り行動することを自分たちは許可していない」「神殿の最高権威者である自分たちの言うことを聞け」という意味があります。かつてイエスも彼らから同じことをされました。(ある日、イエスが宮で人々を教え、福音を宣べ伝えておられると、祭司長たちと律法学者たちが長老たちと一緒にやって来て、イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくれませんか。」)(ルカ 20:1,2)。そして十字架の直前には、〈夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まり、イエスを彼らの最高法院に連れ出して〉(ルカ 22:66)行きました。だからイエスはペテロとヨハネが置かれている状況について全く同情することができ、二人をお助けになることができました(cf.ヘブル 4:14-16)。二人は肉眼では〈大祭司アンナス、カヤパ…〉たちその他大勢の「敵」たちに囲まれていましたが、実はイエスという唯一真の〈偉大な大祭司〉(ヘブル 4:14)がご自分の御霊・聖霊によって二人と共におられたのです。

その〈聖霊に満たされて〉ペテロは堂々と恐れることもためらうこともなく〈彼らに言った〉のです(8-12)。それは、「人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」(ルカ 12:11,12)とのイエスのお約束の通りでした。もちろんペテロはいつも聖霊に満たされていたはずですが、それでも「聖霊の満たし」はそのたびごとに神に「祈り求めて」与えられることでもあります。「あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリスト」(10)とペテロはここでも言います。しかもほんの2~3ヶ月前にはイエスを取

り囲んで尋問し、ついに死刑に定めた「権威」を今なお持っている人々に向かって言ったのです。これは単なる「質問に対する答え」以上の言葉、イエスが言われたように聖霊なる神がペテロを教え導き語らせた言葉、つまり「預言」の言葉でした。そんな「預言者の霊」をもってペテロは詩篇(118:22)が言っているのはイエスのことだと言ったのです。かつてイエスがやはり神殿で祭司長たちから「何の権威によって…」と問われた時にお語りになった話の流れの中でこの詩篇のことを言っておられました(ルカ 20:17-19)。ペテロはそのイエスの態度とことばを思い起こしたに違いありません。イスラエルの民、ことにその最高権威者たちがその権威をもって見下し、捨て、十字架につけて殺したナザレ人イエス、しかし神は彼らに反してそのイエスを死者の中からよみがえらせ、最も大事で最も栄光ある最高の「要の石」となさいました。それ故〈この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。〉(12)これはペテロの言葉である以前に神の保証、約束、宣言の言葉です。〈私たちが救われるべき名〉即ちイエス・キリストを私たち人間(罪人)に与えてくださったのは神です。〈神は、実に、そのひとり子を〉私たち人間に〈お与えになった〉ほどに、イエスを十字架につけた私たち罪深い人間を愛してくださいました。

私たちはただ感謝して信仰によって〈この方〉、神が与えてくださったイエス・キリストを受け、この方を〈私たちにあるもの〉とさせて頂くのです。生けるイエス・キリストの権威、力によって、聖霊に満たされ、主を力強くこの罪の世で証しして生きるのです。